■シリーズ・21世紀の言語学

言語・性・社会

フィリップ・M・スミス著　井上和子　河野　武　正宗美根子　共訳

大修館書店

■シリーズ・21世紀の言語学

言語・性・社会

フィリップ・M・スミス著　井上和子 河野 武 正宗美根子 共訳

大修館書店

訳者略歴

井上和子（いのうえ かずこ）

1919年大阪府生れ。1939年津田英学塾卒業。1958年ミシガン大学M.A., 1964年ミシガン大学Ph. D.（言語学）。現在，津田塾大学学芸学部教授。

河野　武（こうの たけし）

1944年千葉県生れ。1968年千葉大学教育学部英語科卒業。1970年国際基督教大学大学院修士課程修了（英語学）。1978-79年カリフォルニア大学サンディエゴ校留学。現在、大妻女子大学文学部助教授。

正宗美根子（まさむね みねこ）

1943年東京生れ。1965年東京女子大学文理学部英米文学科卒業。1967年国際基督教大学大学院修士課程修了（教育学）。現在，北陸大学外国語学部助教授。

言語・性・社会　© K. Inoue T. Kouno M. Masamune 1987

1987年6月10日　初版発行　定価　1,800円

検印省略

著者　フィリップ・M・スミス

訳者　井上　和子
河野　　武
正宗美根子

発行者　鈴木　荘夫

発行所　株式会社 大修館書店

（101）　東京都千代田区神田錦町3-24

電話　東京(294)2221（大代表）/振替　東京9-40504

印刷／横山印刷　製本／牧製本　装幀／井村治樹

ISBN 4-469-21140-0　Printed in Japan

編者による序

ことばと性の関係の研究は、決して新しいものではない。今世紀のあゆみを見ると、少なくとも部分的にこの問題を扱ったものや、たまたまこれにふれたものなどが時折公けにされる程度であった。しかし、ここ二〇年の間に、著しい関心の盛り上りが見られるようになり、文字通り、何千という論文や論説が、この問題のさまざまな側面に関して執筆されてきた。その中には洞察に富み、有用で、示唆するところが多く、学究的で、非常におもしろいものもある。しかし、おびただしい数のものが、これらの性質のいずれをももちあわせていない。フィリップ・スミスのように、この論題をすぐれた手法で徹底的に掘りおこし本の形にまとめた人は、ほとんどいないのである。

ことばと性に関する言語学的研究は、これまで論争を招かなかったわけではない。それは当然のことながら社会変化がかかわっている研究に典型的に見られることなのである。すなわち、この場合にもこの問題にたいして関心が高まったのは多くの場合現代の女性解放運動の盛り上りや、それに伴って女性差別がおこったり、男女の役割に関して典型像がつきまとうなどの現象にたいして意識が増大したことに関係している。ことばと性の研究では、いくつかの異なる問題点に焦点がしぼられてきた

が、それらにはことばの性差別はもとより、方言やアクセントの主として量的な違いのみならず、男女のことば使いや会話の運び方の違いなどが含まれている。

フィリップ・スミスは、この先駆的な仕事の中で、この研究のあらゆる面を冷静に注意深く観察し、豊富な独創的データ、洞察、解釈を加えているが、大部分は、男女の言語行動における態度の面、社会心理学的な面、そして、そこに見られる相違の根源と原因を中心として研究している。性とことばに関心がある人なら誰でも、たとえ心理学者、人類学者、社会学者、言語学者、あるいは、たんに、人間に関心を持つ人の見解を取ろうとも、この本が非常に適切で、刺激的で、しかも私の経験からすると、魅力的だと思うであろう。

ピーター・トラッドギル

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

謝辞

この本は、一九七八年にブリストルで思い立って以来、ハワード・ジルズ氏の励まし、バジル・ブラックウェル社の叢書編集者ピーター・トラッドギル氏とジョン・ダヴィ氏の支持のもとに、長い間あたためていたものである。フランス、英国、スウェーデン、アメリカ合衆国、カナダでの学会において、この研究期間中に惜しみない助言をくださった多くの方々、とくに、チェリス・クラマラエ氏と知り合いになれる機会を得られた。この仕事は、ブリストル大学、つづいて、ブリティッシュ・コロンビア大学での研究の間、カナダ社会科学・人文科学研究協会からの財政的援助がなければ完成できなかったであろう。また、くじけそうになった時、忍耐強く絶えず励まして下さったジョン・ダヴィ氏に感謝する。最後に、ヘンリー・タジフェル氏から知的・精神的恩恵を受けた多くの人々のリストに、そして一九七五年から一九八一年の間ブリストルで同氏とともに仕事をした優秀な学生・同僚たちの仲間の中に、私の名前も加えたい。

略 語 表

ANOVAs	Analyses of Variance 分散分析
BSRI	The Bem Sex Role Inventory ベムの性の役割調査表
F	Femininity 女らしさ
FS	Female Stereotype 女性の典型像
M	Masculinity 男らしさ
MMPI	The Minesota Multiphasic Personality Inventory ミネソタ多面人格目録
MS	Male Stereotype 男性の典型像
PAQ	The Personal Attribute Questionaire 個人の属性に関する調査表
PRF	The Personality Research Form パーソナリティ調査用紙
SI	Self-image 自己像
SES	Socioeconomic Status 社会経済的地位
SVIB	The Strong Vocational Interest Blank 職業上の関心書きこみ用紙

◆目　次◆

編者による序――iii
謝辞――v
第1章　ことばと性の研究と関連分野――3
言語学的誘因……8
機能的誘因……20
機能主義を越えて――社会遺伝学的誘因……27
第2章　女の発話　男の発話――31
話し手の性の識別……32
イントネーションおよびパラ言語的相関物……49
音韻的性差、文法的性差――発話の性差判別の手がかり……64

異なる地域アクセントと社会心理学的研究……78
結論……85
第3章　女らしさと男らしさの測定――89
性差の測定法――範例……91
性差の測定法にたいする批判……93
性差範疇化方式への移行――性差と性の典型像……99
自己範疇化方式に先行する経験的研究……101
自己範疇化方式の範例……104
男らしさ女らしさの測定にたいする批判……109
性の典型像の研究とその評価……112
第4章　発話による男女の社会的属性の判定――119
実験……126

第5章　相互作用の操作――155
対人的行動の次元――連携と統御……158
コミュニケーションの手段と方策……171
方略から目標へ……206
訳者あとがき――213
参考文献――241
索引――246

言語・性・社会

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第1章　ことばと性の研究と関連分野

数年前、有名な女性解放論者の作家が、ことばと性に関する彼女の新刊書について英国のテレビでインタビューを受けた。その本の中で彼女は、ことばが人類の半数を占める男性によって、男性のために造られた産物であり、その結果女性が軽視され排除されているという力強い議論を展開した。インタビューをしたのは、男性の番組司会者の他に、英語の教授二人を含む三人の学者であった。私も彼女の本を読みまたこの本を書き始めていた頃だったので、彼女が話そうとしていることに強い関心をもっていた。しかし十五分のインタビューの間に話されたことばがほとんど男性の話し手の口から出たのには、驚きかつがっかりした。実際に正確に時間を測ったわけではないが、この本の著者が話した時間は、「民主的に」割りふった持ち時間である三分に達しないと思われ、とくにこのような状況で、著者が話すだろうと期待されてしかるべき時間よりもずっと少なかったのである。これは著者が会話に加わる意志がなかった、あるいは、加わる能力がなかったからであるとは思われなかった——何といっても彼女がその本を書いたのだから。さらに彼女は非常に知的で、はっきり話のできる人だということを私は知っていた。またこれも私が気付いたことであるが、彼女は、他人の話を途中で一度もさえぎらなかったにもかかわらず、彼女自身は、話の途中で二度も中断させられたのである。最後に、彼女は三〇代であり、博士号の要件を満たしているのに、司会者および他の三人の男性に一様に姓ではなく名前で呼ばれていた。

さらに他の人々は、正式な肩書きでずっと呼ばれていたのに反し、一度は「マイ　ディア」(親愛を示す呼び掛け)とさえ、呼ばれていたのである。

このエピソードにより提起される問題は複雑である。最初、私の注意を引いたのは彼女の著書の論題であった。というのは、その本ではことばが男女の関係において果たす役割に関する極端な立場が明確に述べられていたからである。しかしながら、この時私の心をとらえたのは、典型像的な男女のかかわりを、縮図の形で示したようなインタビュー参加者の行動であった。

ほとんどの人は、おそらく、女と男は、同じような状況では異なった反応をするだろうと思っているが、この期待は、後に示すように、ある場合には一応理にかなっているが、現実にまったく根拠のない場合もある。他方、上記のエピソードからもわかるように、ある人が男であるか女であるかを知っていることは、行動に関する日常的な予測を立てるための数ある根拠の一つである。著者は女性であり、断定的な態度は典型的には女らしさとは結びつけられないものではあるが、私は著者が断定的な態度で応答することを期待していた。そこで、なぜ彼女のとった行動が私の期待とかけ離れていたかを説明する必要を感じたのである。面接者たちが断定的にたたみかけて、彼女を攻撃し、沈黙においこんだのだろうか。結局、彼女は、他人とのやりとりの仕方において、典型像的な女性だったのだろうか。あらたまった場ゆえに要請される規範が参加者個人

の個性を圧倒したのであろうか。面接者の一人が彼女の博士号の審査官をつとめることになっていたのだろうか。逆に著者は自分が本に書いたことがらのあるものについて、巧妙な生きた例を示すために、わざとある方略を用いたのだ、という考えさえふと私の心に浮んだのである。

私にはまだその答がわからないが、上記のなんでもないエピソードに驚き、その説明が必要だと感じたことは、私のことばと性に関する考えがずいぶん進歩したことを示している。男らしさ、女らしさについての一般に行き渡った社会的典型像があることには気付いていたし、それらを社会的行動の具体面、すなわち、この場合は話し方とか他人とのかかわりあい、から明確に述べることができた。しかし私はこれらの社会的典型像をもとに、個人の行動にたいする私の予測を述べはしなかった。むしろこれらの予測は、個人としてまた社会活動家としての著者についての私の知識をもとにして立てられたのである。さらに、私の予測が誤りだとわかった時に、私の注意の主たる目標である著者のみならず、その時の状況や彼女以外の関係者についての情報をさがして、とらえにくいかもしれないが、満足できる説明をしようとつとめた。結局、保護者のような、そして恩着せがましい態度で彼女に接し、そして同時に当の「彼女自身」が話すのを聞く機会を私から奪った面接者の態度に私はいらいらし、事態がこれとは異なった方向に進むことがありえなかったのだろうかと思った。

上記のエピソードの議論に出てきたテーマ、すなわち、男女差および男女差に関する信念と、発話やコミュニケーションにたいするこの信念からの強い影響、場面と個人差の影響、態度、価値感、社会変化の必要性、がことばと性の研究という領域全体の中心をなすものである。これらの問題はそれぞれ、ますます盛んになっている女性運動が社会における男女差別に関するあらゆる事実や形を見いだそうとしてきたことと平行して、過去十五-二〇年間の多くの研究や批評の焦点となってきた。これらの目標は、言語学者、社会学者、文化人類学者、心理学者の目標と一致し、彼らもまたほぼ同じ頃に言語の社会的な面、すなわち言語使用にたいする社会的影響、コミュニケーションのために社会的に条件づけられた言語形式のもたらす影響、社会的評価、社会的変化を精力的に研究していたのである。この二つの活動の流れが合流して、ことばと性に関する、新しく活気に満ちた研究分野を明示する出版物がどっと世に出たのである。まず、これらの研究の大部分を促した動機を概観することからはじめよう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com